

詩篇 119:129-136

- 129 あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。
- 130 みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。
- 131 私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。
- 132 御名を愛する者たちのためにあなたが決めておられるように、私に御顔を向け、私をあわれんでください。
- 133 あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください。
- 134 私を人のしいたげから贖い出し、私があなたの戒めを守れるようにしてください。
- 135 御顔をあなたのしもべの上に照り輝かし、あなたのおきてを教えてください。
- 136 私の目から涙が川のように流れます。彼らがあなたのみおしえを守らないからです。

פְּלֹאֹת עֲדוֹתֶיךָ עַל־כֵּן נִצָּרְתָם נַפְשֵׁי:  
 פֶּתַח דְּבָרֶיךָ יֵאִיר מִבֵּין פִּתְיִים:  
 פִּי־פִּעְרָתִי וְאַשְׁאַפֶּה כִּי לְמִצּוֹתֶיךָ יֵאָבְתִי:  
 פְּנֵה־אֵלַי וְחַנּוּנִי כְּמִשְׁפָּט לְאֵהָבִי שְׁמֹךְ:  
 פְּעָמֵי הֶכֶן בְּאַמְרֹתֶךָ וְאַל־תִּשְׁלַט־בִּי כָל־אֲוֹן:  
 פְּדֹנֵי מַעֲשֶׂק אָדָם וְאַשְׁמְרֵה פְּקוּדֶיךָ:  
 פְּנֵיךָ הָאֵר בְּעֵבְדֶךָ וּלְמַדְנִי אֶת־תִּקְוֶיךָ:  
 פְּלִגְי־מַיִם יִרְדּוּ עֵינַי עַל לֹא־שְׁמְרוּ תוֹרָתֶךָ:

第十七字「ペー」は英字アルファベットの「F」に相当する子音字ですが、文字の中に点（強ダゲシュ）が付くと「P」という破裂音になります。

פְּלֹאֹת (פְּלֵא) /ペラーオース (ペレー) …不思議に思う、驚く  
 פֶּתַח /ペータハ…始まり、開いている、入り口、戸口  
 פִּי־פִּעְרָתִי (פִּעַר) /ファーアルティー (パーアル) …広く開ける、口を大きく開ける  
 פְּנֵה־ (פְּנֵה) /ペネー (パーナー) …向きを変える、向く  
 פְּעָמֵי (פַּעַם) /ペアーマー (パーム) …行動、鼓動、足、歩み、金床、出来事  
 פְּדֹנֵי (פְּדֵה) /ペデーニー (パーナー) …解放する、贖う、助ける、救う  
 פְּנֵיךָ (פְּנִים) /パーネーカー (パーニーム) …顔、存在、人、表面  
 פְּלִגְי־ (פְּלִג) /パルゲー (ペレグ) …川、流れ、海峡、運河

ここでの箇所を語っている詩人の思いは、後ろの方から見ていくとより理解しやすくなります。  
 私の目から涙が川のように流れます。彼らがあなたのみおしえを守らないからです。(136 節)

詩人は主の御言葉がないがしろにされている状況に耐えられず、涙を流したのです。御言葉を守らない人々とは誰でしょう。この箇所の中からそれ<sup>おぼ</sup>と思しき言葉を拾い上げるならば、「**わきまえない者**」(130 節)、「**人のしいたげ**」(134 節)などの表現がそれに当たるでしょう。御言葉を愛し主に仕えようとする詩人を<sup>わら</sup>噛み虐げる者がいたのです。

それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち<sup>わら</sup>に似た物と代えてしまいました。(ローマ1:21-23)

パウロが指摘するように、神を知らずに生きる人間は神を神としない罪を犯しているのです。せっかく神を知る機会があっても、その御言葉が求めていることを損得勘定で測っては拒絶する道を選ぶのかもしれませんが。あるいは、福音のメッセージそのものが世の人には愚かに聞こえるのかもしれませんが。もう一箇所パウロのことばを引用しましょう。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。(I コリント1:18-21)

神が行なわれる真理はこの世の常識では理解できるものではなく、その救いの方法も金銭には依りません。多くの人<sup>わら</sup>が追い求めるものはカネであり、それなくば何もできないという価値観が長い歴史をかけて民衆の心に刷り込まれてきました。しかし、神は思わぬところから御手を差し伸べるのであります。

神のことばに耳を閉ざす者に対し、詩人は「**口を大きくあけて**」(131 節)それを求めました。「**みことばの戸が開くと、光が差し込む**」というイメージが彼の中にあっただけでしょう。聖書を開くとその御言葉が光を放って自分に迫ってくる。そこに何か答えがあるのではないかと、この世界を取り巻く不可解な出来事のすべてに答えを与えてくれる神のことばを求め、心の戸を開いて理解を助けてくださる聖霊を受け入れたのでした。

今日の箇所<sup>わら</sup>で一点苦勞して読み解いた部分がありました。詩篇 119 篇は 122 節を除いてすべての節に「神のことば」を表す用語が出てくるということを述べてまいりましたが、132 節にはそれらしき語が見当たらなかったのです。ここは原文に当たらずにはなりません。「**あなたが決めておられるように**」という部分は、「裁き」を意味する「**בְּשֹׁפֶט**」(ミシュパート)という語が使われていて、これは「神のことば」の言い換えです。「裁きの決定によって」という意味で使用されていることが分かります。「**御名を愛する**」(132 節)とも言われていますが、名前はその人の性質を表すことから、詩人が、正しく変わることなく憐れみ深い神の性質を慕っていたと理解することができるでしょう。

133 節の「罪」という語は「偶像」をも意味する「אֱוֵן」(オーウェン)です。神ならぬものを愛する如何なる思いにも支配されないことを願っていました。それは暗闇へと通じる道であり、人の心を病ませ聖なる光を見えなくするものです。

私が罪を罪として理解するようになった頃、意図して悪いことをした夜は不安でなかなか寝付けなかったのを思い出します。神の裁きを恐れたのです。自分が暗闇の中を歩んでいるような感覚がありました。しかし、神のことばはそのような人間を光の中へと導き出すことができます。

**みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。(130 節)**

**御顔をあなたのしもべの上に照り輝かし、あなたのおきてを教えてください。(135 節)**

今日の箇所そのものが御言葉の光に照らされていることが分かります。闇の内を歩むすべての人に神は御言葉を示し、真理の内を歩まないかと呼びかけておられます。その呼びかけが踏み躪られている現実に詩人は耐えられなかったのです。私たちも日々主の呼びかけに応え、それと同時に御言葉をもって友に語りかける生き方を志していきたいと思えます。